

フェミニスト文学批評をめぐる一考察

馬 場 美 奈 子

フェミニスト文学批評の母は20世紀イギリス作家ヴァージニア・ウルフであるとされるが、アメリカにおけるフェミニスト文学批評は、1960年代末期のフェミニズム運動の中で「意識覚醒」の体験をした若い女性研究者たちによって始められた。フェミニスト批評家たちを衝き動かした直接的な動機は、①大学の英文学科の人事決定およびカリキュラム編成（どの作家を教えるかという問題）における性差別に対する反発、②文学作品および文学批評のテキストに見られる男性中心主義に対する反発、であった。現在に至る約20年の歩みの中で、多様な批評理論と実践批評が提出されてきたが、そこに一貫して見られるのは、言語、思想、文化の体系の中に女性を抑圧する力が組み込まれているという基本的な認識であり、その認識に基づいて既成の価値観の再考と文学研究の活性化をはかり、そして更に社会の変革を目指す立場である。

小論の目的は、アメリカのフェミニスト文学批評の主な理論と業績をアメリカ文学研究の分野を中心に概観評価し、今までの成果と今後の課題を考察することであるが、その試みはまた、文学と女性を読むアメリカの女性研究者たちの意識とアメリカの文学批評界の状況を探る試みとも、なるであろう。

(1)

アメリカのフェミニスト文学批評の初期の段階は、“feminist critique”と呼ばれる批評が中心であった。「フェミニスト・クリティーク」という用語は、の

ちに Elaine Showalter が評論 “Toward a Feminist Poetics” (1979) の中で初めて使ったものであるが、これは男性の書いたテキストを女性の視点から読み直し、そこに表われた女性観を分析し批判する作業を意味する。そこでは、神話や文学における女性像のステレオタイプ化、文学批評や文学史における女性の抹消と歪曲、また言語体系における女性の記号化（文明対自然、理性対本能、能動性対受動性などの男女の二項対立概念）が批評の対象となる。その代表的な業績の一つが、性の政治学（即ち性の力関係）を論じた Kate Millett の著書 *Sexual Politics* (1970) である。ミレットはここで、まず両性の気質、役割、地位などについての社会通念を「性のイデオロギー」と呼び、そのイデオロギーが社会、経済、教育の構造から神話や宗教の言説に至る社会のあらゆる領域を支配し、両性の心理に影響を及ぼし、特に女性の自己嫌悪と自己放棄をもたらしている、と論じた。

ミレットは更に、J. S. ミルやエンゲルスなどの思想家における性革命の思想を解明し、全体主義的政治体制や精神分析学における性の反革命の思想を分析したのちに、性の解放の旗手とされる D. H. ローレンス、ヘンリー・ミラー、ノーマン・メイラーなどの文学作品の中から、女性を抑圧する反革命的な性のイデオロギーを検出してみせた。この書物においてミレットは、父権制のイデオロギーとその心理的影響を辛辣な文体で告発しており、Janet Todd が指摘するように、誤読、抽象的な一般化、作品の文学性の無視などの欠点も見られるが、しかしながらトッドも認めるように、これは1960年代後半の変革の時代の思潮に合致した論評であり、フェミニスト批評の先駆的な理論書としての役割を果たしたと言える。

(2)

Sexual Politics におけるように、フェミニスト・クリティークが検証した女性像は、概して否定的なものであったが、これに代わる肯定的な女性像が求められるようになり、1970年代後半には、ショウォルターが唱導する“

gynocritics”が盛んになり、アメリカのフェミニスト文学批評の主流を占めるようになった。但し、女性のステレオタイプ化を批判する仕事が完了あるいは放棄されたわけではなく、例えば Nina Auerbach は、あくまでも男性の文学の中に「侵入する者」として、「女性のプリズム」を通して男性の文学を読むことを唱道する (157)。フェミニスト・クリティークの仕事は、より洗練された形で継続して行なわれているのであり、のちに取りあげる Annette Kolodny のフロンティア論もその一例である。

さて、ジャイノクリティクスとは、社会的・文化的性差 (gender) が女性特有の世界観と感受性を形成するという考え方に立脚して、女性中心の視点から女性文学を読み、個々の女性作家を同時代の文化および文学史の中に位置づけようとする仕事である。ショウォルターは “Feminist Criticism in the Wilderness” (1981) の中で、文化人類学における二重文化の概念を応用して、ジャイノクリティクスを次の様に説明している。女性は主流文化と女性文化の二つの領域に属し、二つの社会的・文化的伝統に連なるものであり、女性の文学は「二重の声の言説」であり、またジャイノクリティクスの目的は、「女性の経験」に根ざした「女性の文化」を再発見し、主流文化の言語を手段として女性の文学の伝統を再構築することである。これは言わば文学の母たちを探し、姉妹たちの絆を確認する作業であり、その方法は学際的である。即ち、歴史学、文化人類学、社会学、心理学などの知識を援用しながら、女性文学に共通のテーマ、プロット、イメージなどを検出し、テキストの深層に隠された意味とそこに表わされた女性の価値観を読み取り、女性作家の想像力の働きを探る、という方法がとられる。もっとも、ジャイノクリティクスにおいて「女性の経験」や「女性の美学」が単純に称揚されているわけではなく、ショウォルターも当初から「女性の想像力」という概念の問題性を意識していた (*A Literature of Their Own* 12)。

なお、ジャイノクリティクスの研究対象は、文学作品を初めとして日記、手紙、書評など多岐に亘り、その成果は特に、埋ずもれていた (或いは文学史か

ら抹消されていた)女性作家たちの発掘であると言える。このことに関連して、ジャイノクリティクスに見られる一つの特徴は、作家の人生と作品を等しく重視し、作品を作家の自己投射とみなすロマン主義的な伝記的解釈の傾向である。例えば、19世紀の女性文学における作品世界とヒロイン像の解明が、作者自身の性別役割と自己表現との葛藤に関連づけてなされる。つまり、貞淑で献身的な「家庭の天使」や男性芸術家の想像力を鼓舞する「詩神」の役割が女性に課され、女性の発言は禁圧されていた時代に生きながら、敢えてペンを取ろうとした女性作家を取り巻く経済的・社会的・文化的環境や作家自身の内面的・外面的生活との関わりにおいて、ヒロインが論じられる。例えばショウォルターは、*A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing* (1977)において、代表的な女性作家たちのみならず同時代の群小作家たちをも取りあげて、“feminine”, “feminist”, female”の三段階を経てきた女性文学の伝統を再構築しようとしているが、19世紀前半の「フェミニン・ノヴェル」について、次の様な見解を示している。家庭における自己の役割と文学界のダブル・スタンダードとの両面楚歌に陥った女性作家たちは、男性のペン・ネームを使って男性作家の哲学的・形而上学的な文体を模倣するか、あるいは伝統的な女性像を「女性的な」文体で描く（表面的な細部描写や人間関係の描写に力点を置く）か、どちらかの方法によって創作と家庭の両立をはからざるをえなかったが、例えば男性名を名乗ったジョージ・エリオットの描くヒロイン像も、自己実現を追い求める作者自身の逆像とも言える自己放棄的な女性像にならざるをえなかった。一方シャーロット・ブロンテの場合は、女性の欲望を表現し、しかもそれが受容されるためには、一般的な狂女伝説の様式を応用せざるをえなかったが、その一方でブロンテは、精神と肉体の融合をからくも達成する自己充足的なヒロイン像を作りあげたのであり、それは実人生において閉ざされた生活を強いられた作者自身の願望充足であった。

ショウォルターに続いて Sandra Gilbert と Susan Gubar は、共著 *The Mad Woman in the Attic* (1979) において、女性文学の中では如何にして「家

庭の天使」と「狂女」のステレオタイプが父権制打破の戦略として用いられ、作家の幽閉感覚、書くことに対する不安、あるいは怒りなどの心理が「狂女＝発言する女」のイメージの中に投射され、幽閉から逃亡への物語が構築されているか、を熱を込めて語っている。

なおジャイノクリティクスの批評家たちは、若き女子学生が同一化できるような女性像を発見し呈示したい、という教育的な目的意識を持っているが、その一例として、*The Female Imagination: A Literary and Psychological Investigation of Women's Writing* (1975) の著者 Patricia Spacks を挙げることができる。この書物においてスパックスは、読者反応批評と精神分析批評の方法を取り入れて、女子学生たちの知的・感情的反応を報告しながら、それに対応する形で女性作家に共通の感受性と想像力を探り、女性文学の力強さを読み取ろうとしている。スパックスは17世紀から20世紀に至る女性の手になる小説、自伝、日記などの中から、消極的な受苦と死、戦略としての積極的な忍耐と献身、知的な自己探求、および自己創造と現実再構築、などの心理的ドラマを読み解き、結論として、社会から疎外された状況に対する消極的な対応の仕方は怒りであるが、積極的な対応手段は想像力であり、現実と幻想の相互作用こそが女性文学の強味である、と主張している。ここには、女性文学に対して自己嫌悪や知的・感情的分裂などの否定的反応を示しがちであった若い女子学生たちを啓発せんとする意図が、窺われるのである。

さてここで、特にアメリカ研究に関わるジャイノクリティクスの業績に焦点を当ててみたい。例えば Nina Baym の著書 *Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America 1820-1870* (1978) は、19世紀なかばのアメリカにおける女性の職業作家と女性読者層の抬頭の現象に注目し、一連の家庭小説をその時代の視点から読み直す試みである。家庭小説において、若きヒロインがヴィクトリア朝的な男女観に束縛されながらも、義務感、自制心、自己犠牲などの美德を武器として厳しい現実に対処し、自己を形成してゆく物語は、穏健で「プラグマティックなフェミニズム」(18) を呈示した、とベイム

は論じている。これらの小説はベウムも認めるように、従来の文学的基準からすれば偉大な文学であるとは言えないにしても、物語のパターンとイデオロギーが当時のアメリカ文化と女性の意識を反映しているという点において、歴史的・社会的な価値があると言えるだろう。更にベウムは、*Novels, Readers, and Reviewers: Responses to Fiction in Antebellum America* (1984) において、前者で扱ったジャンルを含む女性文学の周辺を書評を手懸りに論じ、批評家による女性作家と女性読者の操作という現象を分析し、19世紀前半のアメリカの文化と文学界に光を当てようとしている。ベウムによれば、女性作家は一様に女性の代表として書く（あるいは書くべき）と期待され、主題、語法、語調に関する規制を受け、しかもその制約に従って書けば、「かよわき性」の手になる作品は非芸術的である、と評定されたのであり、また一方、力強い作品を書く女性作家は、「女性の天才」としてあくまでも例外視された。このダブル・スタンダードは、ショウォルターが *A Literature of Their Own* の中で指摘した19世紀イギリスの文学界の状況とも重なりあう。また批評家たちは女性読者に関して、ロマンティックな物語と甘い感情を求める「無垢で純粋な女性」を想定し(59)、その読者像に合わせて、小説の目的とは家庭原理の称揚と若い女性の社会化にあると規定し、情熱的な性愛を描く小説を抑圧しようとした。そこには、情熱的な小説が多く若い女性たちに読まれたという現実を無視する態度が見られるわけだが、ベウムはこれを現代に至る批評家と一般読者の分裂、および「エリート小説」と「大衆小説」の分離の始まりと見ている。即ち、批評家は小説に「シリアスなもの」、例えば倫理的あるいは哲学的な意味を求めるのに対して、読者は物語の面白さを求める、というギャップである。しかしながらベウムはまた、19世紀の批評家たちは読者の感情的な反応を十分に認識し、小説の機能とは読者の興味をひくことであると理解していたので、読書行為を意味生産行為とは考えず、従って現代の批評家よりも寛大に多様な小説を書評欄に取りあげた、と指摘している。

以上のように、ベウムの業績は忘れ去られていた過去の女性文学とそれを取

り巻く文化的状況の解明であり、フェミニスト文学批評のみならずアメリカ研究の観点から見ても興味深いものがあるが、コロドニーの著作も同様の貢献をしている。コロドニーは“playful pluralism”を主張するフェミニスト批評家であり、自己の研究の地平を女性中心のジャイノクリティクスから少しずつらし、研究対象によって批評の枠組を選定する柔軟な姿勢を取る。*The Lay of the Land: Metaphor as Experience and History in American Life and Letters* (1975)においては、フェミニスト・クリティークの視点からイメージ・シンボル論や心理学理論を応用して、アメリカの白人男性が描いたフロンティア像におけるパストラル幻想の伝統を論じている。コロドニーによれば、土地や風景の中に休息、充足、再生などの女性原理を読み込もうとする楽園志向のモチーフは、従来のヨーロッパ文学にあったものであるが、そのパストラル幻想の元型がアメリカに渡ると、大陸の発見と開拓の歴史的現実と広大な土地の地理的条件に結びついて、「女性としての土地 (land-as-woman)」(146)の経験を表現する独特の象徴体系を生み出した。つまり、植民地時代の報告書の類いから現代の小説に至るまでの代表的なアメリカ文学において、土地や風景の描写の中には母の抱擁と処女の誘惑の二種類のイメージが回帰する。しかもこの二つの女性的なイメージは、しばしば同一作品の中に混在し、主人公は大地の息子であると同時に大地の恋人として登場し、母胎回帰願望を持った思春期的人物として描かれることが多い。コロドニーはそこに、自然(母)を開拓(略奪)したことに対する罪悪感、恐怖感、欲求不満感などの心理的反応を読み取っているが、結論として、現代アメリカの枯渇した土地の現実に適応して生きるためには、男性性と女性性の二項対立的メタファからの脱却と新しいメタファの創造が必要である、と提言している。

コロドニーはまた *The Land Before Her: Fantasy and Experience of the American Frontiers, 1630-1860* (1984)においては、ジャイノクリティクスの視点から白人中産階級女性の手紙、日記、西部宣伝文書、西部家庭小説などの中にフロンティア像の歴史を辿っており、これは *The Lay of the Land* を補完

する仕事であると言える。その論旨は、女性は男性のように荒野の森に自由の楽園を求めるのではなくて平原に注目し、そこに母の庭園を移植する、あるいは庭園のイメージを与えることによって、フロンティアを手なづけ、家庭に変形した、というものである。このような女性のフロンティア文学に見られる子供時代への回帰や母なるものによる霊的再生のモチーフは、男性の文学におけるフロンティア像と比較することも可能であろうが、しかしコロドニーが言うように、女性が描く平原の楽園のイメージには、男性が描くフロンティア像における性的誘惑のイメージや幼児退行のイメージは無い。また、特に19世紀半ばの女性の西部文学には、孤独なヒーローの姿に代えて、男女が共存する家庭と共同体の理想像が呈示されていた。19世紀の「手なづけるイヴ (domesticating Eve)」(224) の物語は、フロンティアにおける「生き残りの心理的戦略としての幻想」(10) であり、同時に、言わゆる「女性の領域」理論の文化的文脈の中に位置するものであり、白人女性の文化的記号なのである。フロンティアをめぐるコロドニーの二冊の著書は、従来のアメリカ文学史観における荒野対文明の二項対立的なフロンティア論に加筆を施し、異なる読み方を提起する、という大きな成果をあげていると言える。

以上、ジャイノクリティクスの理論と業績の一部を見てきたが、それではその欠点は何であろうか。特に初期の仕事においては、①白人中産階級女性の文学の批評に偏りがちである、②社会的・歴史的な差異を軽視して「女性の文化」を語る傾向にある、③作家と主人公を同一視する傾向が強い、④作品の主題、構造、人物像などの批評に偏り、言語学的な分析が不充分である、などの欠点が見られた。

(3)

さて、ジャイノクリティクスの欠点の第4点を補うのが“gynesis”であり、ジャイネシスの関心は主として言語学と認識論にあると言える。この一派はアメリカでは1980年代になって抬頭したものであり、主な担い手たちは、今まで

見てきた批評家たちとは出発点を異にする一世代若い世代であり、記号論やポスト構造主義などの現代批評理論を学び、フランスの新フェミニスト批評家たちの影響を受けている。

フランスの新フェミニスト批評は、英米のフェミニスト批評が男性中心主義的な言語体系の中に留まったままで女性の経験と文化を語ることに對して批判的であり、自らは英米のフェミニスト批評を超えると自負し、自らを反フェミニストともポスト・フェミニストとも位置づけている。その方法論は、フロイト派の精神分析を読み直し、性概念と言語体系を根底から問い直し、意味の「差延」、「転位」、「脱中心化」、「戯れ」などのポスト構造主義の概念を基盤として、女性の性 (sexuality) と言語 (textuality) の関係を探ることである。ジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) は、ソシュールの言語学体系におけるヒエラルキーを崩し、またラカンの精神分析学における「象徴界」(父の法) と「想像界」(母との一体化の領域) の二項対立的な構造を解体しようとする。即ち、「想像界」の概念を「セミオティック」の概念に置き換えて、「語る主体」とは超越的な自我ではなく「場」であり、「象徴界」と「セミオティック」の相互作用の過程が「語る主体」を生成する、としている。クリステヴァの基本理念は、生成過程、流動性、周縁性であると言える。一方ルース・イリガライ (Luce Irigaray) は、女性の意識と言語の源泉を女性のからだに求めており、女性のからは宇宙のリズムと呼応し、女性の性は多元的、包摂的であり、そして女性の文学は同時平行的で流動的である、と主張する。イリガライは精神分析を批判しつつも、女性=非理性の観念を新たに称揚している、と思われる。

アメリカのジャイネシスの批評家たちも、基本的には西欧文化における父権主義的象徴体系の衰退を認識し、「女性的な流動性」や「周縁性の言語」の理論に共鳴するものであるが、しかし「女性の言語」の神話へと退行することに対しては警戒をする。フランスの新フェミニスト批評家たちがするようにジャイノクリティクスの「文化的構築物としての女性」の概念を拒否することは、「女性」を形而上学的あるいは生物学的定義に還元することにつながり、現実の女

性たちの存在を無視することになりかねない。ジャイネシスの旗手 Alice Jardine は、*Gynesis: Configurations of Woman and Modernity* (1985) においてそのような危険性を考慮に入れながら、自らの理論の構築を試みている。“gynesis”とはクリステヴァの言う「生成過程にある女性」を意味する言葉であるが、女性を「他者性」の「空間」として言語の中に再統合してゆく過程を意味するものであり、その可能性はラカンやデリダの文体にも見られる、と言う。即ち、ジャイネシスのめざす「女性の言語」とは、生物学的な意味での女性が占有する言語ではなく、新しい「読み」のプロセスであり、Mary Jacobus の表現によれば、「見方の差異 (difference of view)」ということになる。ジャイネシスは西欧の人間中心主義的な世界観を問い直し、恣意的に「自然化」された既成の世界を脱自然化し、異質な空間を構築するために異質な言語の可能性を探ろうとする批評活動であるが、しかしながらその目標はあくまでも、ポストモダンな認識論とフェミニズムの目的意識との接点を見つけることであり、言語学的・認識論的な理論に終止して抽象的なユートピア性に陥ることのないように留意し、理論の実践を心懸けている。ジャディーンはジャイネシスの立場を「新しいフレンチ・アメリカン・コネクション」¹⁾、即ち「倫理的」関心と「過程」(クリステヴァの言う「生成過程」)との新しい結合、と定義している(44)。このような実践重視や倫理主義の側面は、フランス派のジャイネシスにおけるアメリカ的特性であると言えるだろう。しかしながらトッドが指摘するように、ジャディーンへの批評は、歴史的考察の不足、解放されるべき現実の存在の軽視、などの欠点から逃れえてはいない。

その点 Elizabeth Meese の方が、歴史的・社会的感覚において優れている。ミースは *Crossing the Double-Cross: The Practice of Feminist Criticism* (1986) において、脱構築主義的な理論を女性のテキストに当てはめて実践し、そして脱構築から再構築へ向かう批評、「社会改革をめざして励む批評」(147)を志している。ミースの批評の例として、現代黒人女性作家 Alice Walker の小説 *The Color Purple* に関する論考に言及しておきたい。ミースは、この小説

が書簡体という古典的な文学様式を枠組として用いながら、黒人女性の言語と意識によって男性中心主義に挑戦し、社会的因襲と審美的規準を乗り越えようとしていると論じ、男女の対立的支配関係が解体に至る過程を解明している。手紙の書き手は、父親と夫から精神的・肉体的抑圧を受けてきたヒロインのセリーと、自立の道を歩んできた妹のネティであるが、ミースは無学なセリーの感性と文体そのものの意義のみならず、ネティの手紙がプロット展開において果す役割にも注目している。ネティがアフリカの伝道の地から愛する姉のセリーに宛てて書き続けた手紙、つまり女性の社会転覆的な言説は、セリーの夫のアルバートによって隠蔽、抑圧され、そのことによって夫婦の性的支配関係が温存されている。ところがセリーとアルバートの愛人シャグとの交流を契機として、セリーの反抗、自立の決意、性的な自己発見、という展開が見られる。更に重要なことは、セリーとシャグの女性同志の連帯行為によってネティの手紙（女性の言語）がセリーの手に奪い返され、そこからセリーの知識（即ち力）の獲得と、アルバートの「抑圧者」から「同盟者」への転換が導き出されることである。この論考においてミースは、ジャイネシス派の理論を応用し、*The Color Purple* における黒人女性の性的・実存的アイデンティティの問題を黒人女性の言語表現と言語獲得闘争に焦点を絞って論じているわけだが、ここでミースが支配の構造から対等な男女関係への転換という政治的・倫理的なテーマをも強調していることに注目したい。

(4)

見てきたように、ジャイノクリティクスの一枚岩的な「女性の文化」の概念も、ジャイネシスの比喩的な「他者性の言語」の概念も、それぞれ個別化された現実を軽視する危険性を孕み、それぞれ異なる意味において本質主義に陥りがちであるが、それに対して“materialist feminist criticism”は、本質主義を排してあくまでも実質性に寄り添い、歴史的・社会的変化と多様性に対する意識を保持する立場を取る。Judith NewtonとDeborah Rosenfeltは、共編著

Feminist Criticism and Social Change: Sex, Class and Race in Literature and Culture (1985)の序文において、マテリアリスト・フェミニスト批評の基本理念を提出している。①文学作品や文学批評は歴史の特定の時点の「産物」および「介入」である。②作品の意味は読者によって歴史的状況の中で再生産され、審美的評価の基準は歴史的・社会的に変化する。③性差の問題は階級、人種、性的嗜好などの社会的カテゴリーとの関わりにおいて考察されるべきである。そして、マテリアル・フェミニスト批評の方法論の特徴は、以下の通りである。①「女性の文化」を強調せず、むしろ女性の多様性や女性間の反目、階級差、人種差に注目し、例えば労働者階級の女性の文学を取りあげ、また黒人女性文学批評やレスビアン文学批評を取り込む。②性差の力関係を変革するために、女性中心の視点を離れ、男性をも階級や人種との関わりにおいて捉え、男性について書かれたものも扱い、また男性が提出した理論、例えば精神分析批評やマルクス主義批評などの理論を積極的に応用し、更に男性によるフェミニスト批評も受容する。③すべての被抑圧者の状況を捉え直す努力をする。④批評の対象となるジャンルを限定せず、純文学から大衆文学、映画、テレビなどの大衆文化にまで拡げる。

ここでマテリアル・フェミニスト批評の一例として、現代の大衆文化と働く女性をめぐる論文を取りあげてみたい。Leslie W. Rabineは“Romance in the Age of Electronics: Harlequin Enterprises”(1985)と題する論文において、1970年代以後のハーレクイン・ロマンスのヒロイン像を、読者と作者の経験と意識の変化に関連づけながら、ハイテク化された複合企業時代の社会的・経済的状况の中に位置づけて論じている。近年のハーレクイン・ロマンスに登場するヒロインは一昔前のヒロインとは異なり、秘書や看護婦などの職業ではなく、会社重役、コンピュータ技師、カー・レーサーなどの華麗な職業に従事しており、精神的・経済的自立を達成することによって、事務職、サービス業、電子機器製造などの非個性的で断片的な仕事に就いている女性読者の無力感を代償すると同時に、職場のボス(恋人でもある)との職業的・感情的葛藤

において読者の内面的苦悩と不満を共有するものである。そしてヒロインは自己探求の苦闘のうちに、人間同志のつながりを尊重する「女性的」な「関係的」生き方を競争原理が支配する職場の中に導入し、職場の体質を改善し、男女双方の幸せをもたらすのであり、このユートピア的な解決法によって読者の願望を充足させることができる。ラビーンは、ハーレクイン・ロマンス産業における物語の定型化と流通手段の超合理化を批判しながらも、それらのロマンスが現代の働く女性の経験と願望を描き出し、ある種の力強さを持つ、と考えている。ラビーンは更に、最近のハーレクイン・ロマンスの作者たちに見られるロマンス産業批判と創造性追求の動きにも言及し、それは女性作家であり複合企業体の労働者でもある作者たち自身の自己探求のドラマ、つまり「実人生におけるロマンス」(264)である、と結論している。ラビーンの論考は、女性向けのロマンス産業という大衆文化の一現象を構造的に捉えて、性差と階級の接点に横たわる問題、即ち男性中心主義的な経営体制と女性労働者(作者、ヒロイン、読者の各層)との葛藤にメスを入れた、非常に興味深いマテリアル・フェミニスト批評の仕事であると言える。

なお、このような流れの中で、最近ではジャイノクリティクスの批評家たちも「女性の文化」に関心を集中するのではなく、より広い歴史的・社会的視座から男女の関わり方を捉えようとしている。例えば、ギルバートとグーバーの近著 *No Man's Land Vol. I: The War of Words* (1988) は、ジャイノクリティクスにおける歴史感覚の深化を反映していると思われるが、この書物についてはのちに触れる。

(5)

以上のようなアメリカのフェミニスト文学批評の流れと多様性を踏まえて、現在までの成果を総括してみよう。

①忘れられていた女性作家の発掘と女性文学の伝統の再構築——この研究成果に伴ない、女性作家シリーズ、女性文学研究シリーズ、女性文学選集、およ

び個別研究が多数出版されている。

②「母なるもの」の再発見と母娘関係の再評価²⁾——母性賛美は男女の特質の二項対立概念への退行である、という批判もあるが、その危険性を認識したうえで、父権制の長い歴史の中で蔑視されてきた母親と向きあい、慈しみ育む親としての母親の価値観を再評価することは、人間の新しい積極的な生き方の可能性を探る道であろう。

③文学研究における基本的な問題の提起——審美的価値規準、文学史の時代区分、およびテキストの解釈はいずれも相対的なものである、という考え方を導入した。

④文学批評界におけるフェミニスト批評の浸透——特にニュー・ヒストリシズムとマテリアル・フェミニスト批評は、歴史を支配者と被支配者の多様な声の物語として捉える立場や、多様なジャンルのテキストを照合して論ずる方法において類似しており、親和関係にある。³⁾ また男性の批評家、特にマルキシスト批評家や脱構築主義批評家によるフェミニスト的な批評が試みられており⁴⁾、男性批評家による解説書、K. K. Ruthven 著 *Feminist Literary Studies: An Introduction* (1987) も出版されている。

⑤文学史とキャノンの修正における貢献——例えば、最近のアメリカ文学史書 *Columbia Literary History of the United States* (1988) においては、編者と執筆者の五分の一以上を女性が占め、内容的にも、女性文学を論じた四つの章を初めとして女性作家に関する多くの記述がある。また *The Norton Anthology of American Literature* の第2版 (1985) および第3版 (1988) においても、収録された女性作家の作品の数は大幅に増大している。

(6)

アメリカのフェミニスト文学批評は、以上のような成果をあげているが、小論を結ぶにあたって、フェミニスト文学批評に残された課題を指摘しておきたい。

①階級や人種の考察、およびマイノリティ女性の文学やレズビアン文学の研究の促進。

②多様な理論の統合の模索——例えばトッドは、ジャイノクリティクスを基本として、そこにジャイネシスの言語学的洞察力を援用し、そして更にマテリアリスト批評のイデオロギー概念と歴史感覚を有効に使う、というモデルを提案している(138)。しかし、その実践となれば、必ずしも容易なことではないだろう。

③文学批評界との関わり方——批評界の主流に浸透することについては、フェミニスト批評家たちのあいだでも意見が分かれるところであり、浸透とは男性による女性の理論の横領・歪曲であると考えて、警戒する向きもある。特に、理論論争に巻き込まれることに対する抵抗は大きい。しかしそれにしても、浸透よりも反発の方が今でも大きな問題であるように思われる。

ギルバートとグーバーは先述の *No Man's Land* において、19世紀末以来の女性作家の抬頭と、それに対する男性作家や批評家の拒否反応と、そのような男性の怒りと攻撃に対する女性作家の側の不安と反撃、という「言語の戦い」の歴史を分析しているが、この書物に対する女性批評家 Martha Banta の書評が概して好意的であるのに対して、男性批評家の William Pritchard はモダニズムの歴史の書き変えの試みとしては評価しながらも、誤読、歪曲があるとして酷評している。このようにして、フェミニスト批評書とそれをめぐる批評界の対応は、まるでギルバートとグーバーが分析してみせた両性間の言語の戦いの続編を展開してゆくかの如くである。結局フェミニスト批評の最も基本的な課題は、この葛藤の物語と現実とに忍耐強く対峙し、対立関係を深めるのではなく、如何にして自らの他者性、自らの差異を説得的に語り、社会を変革してゆくかを探ることであろう。

注

* 本稿は、第23回アメリカ学会年次大会におけるシンポジウム「アメリカ研究と女

性」(1989年3月30日)の一環として行なった報告をもとに加筆修正したものである。

- 1) ジャディーンはここで、イエール学派の脱構築主義批評家 Geoffrey Hartman の論文 “Psychoanalysis: The French Connection” のタイトルをもっているであろう。
- 2) 母の再発見と母娘関係の再評価は、ジャイノクリティクスとジャイネシスの両派においてなされているが、特にジャイノクリティクスの場合は、心理学者 Nancy Chodorow の影響が見られる。チョドロウは *The Reproduction of Mothering*(1978) において、娘の母親離れが遅いことは、社会の個人主義的な競争原理に代えて人間関係を尊重する協調的な生き方を促進する、と積極的に評価した。
- 3) 最近の評論集、Veeseer 編 *The New Historicism* (1989) にも、マテリアリスト・フェミニスト批評の論文が数篇収録されている。
- 4) ジャディーン他編 *Men in Feminism* (1987) を参照。

参考文献

- Auerbach, Nina. “Engorging the Patriarchy.” Benstock 150–160.
- Baym, Nina. *Novels, Readers, and Reviewers: Responses to Fiction in Antebellum America*. Ithaca: Cornell UP, 1984.
- . *Woman’s Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America 1820–1870*. Ithaca: Cornell UP, 1978.
- Banta, Martha. Rev. of *No Man’s Land* Vol. I by Sandra Gilbert and Susan Gubar. *American Literature* 60. 3 (October 1988): 463–465.
- Benstock, Shari, ed. *Feminist Issues in Literary Scholarship*. Bloomington: Indiana UP, 1987.
- Chodorow, Nancy. *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*. Berkeley: Univ. of California Press, 1978.
- Eagleton, Mary, ed. *Feminist Literary Theory: A Reader*. Oxford: Basil Blackwell, 1986.
- Elliott, Emory, ed. *Columbia Literary History of the United States*. New York: Columbia UP, 1988.
- Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic*. New Haven: Yale UP, 1979.
- . *No Man’s Land: The Place of the Woman Writer in the Twentieth Century*

- Vol. I: *The War of Words*. New Haven, Yale UP, 1988.
- Jacobus, Mary. "The Difference of View." *Women Writing and Writing about Women: A Challenge to Theory*. Ed. Mary Jacobus. New York: Barnes & Noble Books, 1979. 10–21.
- Jardine, Alice. *Gynesis: Configurations of Woman and Modernity*. Ithaca: Cornell UP, 1985.
- and Paul Smith, eds. *Men in Feminism*. New York: Methuen, 1987.
- Kolodny, Annette. *The Land Before Her: Fantasy and Experience of the American Frontiers, 1630–1860*. Chapel Hill: The Univ. of North Carolina Press, 1984.
- . *The Lay of the Land: Metaphor as Experience and History in American Life and Letters*. Chapel Hill: The Univ. of North Carolina Press, 1975.
- Meese, Elizabeth A. *Crossing the Double-Cross: The Practice of Feminist Criticism*. Chapel Hill: The Univ. of North Carolina Press, 1986.
- Millett, Kate. *Sexual Politics*. New York: Double Day & Co., 1970.
- Moi, Toril. *Sexual/Textual Politics: Feminist Literary Theory*. London: Methuen, 1985.
- Newton, Judith and Deborah Rosenfelt, eds. *Feminist Criticism and Social Change: Sex, Class and Race in Literature and Culture*. New York: Methuen, 1985.
- Pritchard, William. "Salvos from the Gender War." *Hudson Review* 41. 2 (Summer 1988): 370–376.
- Rabine, Leslie W. "Romance in the age of electronics: Harlequin Enterprises." *Newton* 249–267.
- Ruthven, K. K. *Feminist Literary Studies: An Introduction*. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- Showalter, Elaine. "Feminist Criticism in the Wilderness." 1981. Showalter, *The New Feminist Criticism*. 243–270.
- . *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing*. Princeton: Princeton UP, 1977.
- , ed. *The New Feminist Criticism: Essays on women, literature and theory*. London: Virago, 1986.
- . "Toward a Feminist Poetics." 1979. Showalter, *The New Feminist Criticism*. 125–143.
- Spacks, Patricia Meyer. *The Female Imagination: A literary and psychological investigation of women's writing*. New York: Alfred A. Knopf, 1975.

フェミニスト文学批評をめぐる一考察

- Todd, Janet. *Feminist Literary History: A Defense*. Cambridge: Polity Press, 1988.
- Veeder, H. Aram, ed. *The New Historicism*. New York: Routledge, Chapman and Hall, Inc., 1989.

Summary

A Survey of Feminist Literary Criticism in America

Minako Baba

Since its inception in the late 1960's, feminist literary criticism in America has developed various theories and approaches and produced a great amount of practical criticism. This essay is an attempt to survey its development by examining the four major theories and reviewing a selection of criticism, and to evaluate the achievements attained and to point out the problems yet to be resolved.

"Feminist critique," which was the predominant form of feminist literary criticism at its earliest stages, is primarily engaged in analyzing the stereotypical images of women in texts written by men and the phenomenon of the devaluation of female authors in literary criticism and literary history. "Gynocritics," in an effort to offset the negative images of women as analyzed by feminist critique, advocates the notion of "women's culture" and concerns itself with re-reading women's writing, to place each work in its social and cultural context and also to reconstruct the tradition of women's literature, centering around common themes, plots, and images. "Gynesis," initiated by younger feminist critics who were influenced by French feminist criticism, is concerned with linguistic and epistemological aspects of literature and seems to combine postmodern theory with feminist ideology. The term "gynesis" means "woman-in-process," that is a new process of reading and writing which tries to incorporate "otherness" and "marginality," features associated with but

not exclusive to women, into the traditional patriarchal linguistic system. In the meantime, "material feminist criticism," with its historical awareness and ideological concerns, has tried to pay attention to particular historical and social aspects of women such as class and race, and it deals with a wide range of genres from serious literature to movies.

The following achievements have been made by these various approaches advocated by feminist literary criticism: (1) rediscovery of women writers of the past and reconstruction of the history of women's literature, (2) reevaluation of "the mother" and mother-daughter relationship, (3) posing alternative views to traditional literary standards and textual interpretations, (4) a degree of recognition and influence of feminist criticism in the mainstream literary criticism—some examples of attempts at feminist criticism on the part of male critics, and (5) contributions to the revision of literary history and canon.

Finally as regards the problems yet to be dealt with: (1) a further look into the literary expressions of the complex relationships of class, race, and gender, (2) an attempt at a synthesis of various theories, and (3) a search for an ideal relationship with the mainstream literary criticism. The ultimate problem of feminist literary criticism seems to be how to confront the antagonism on the part of some mainstream male critics and to bring about cooperative endeavors for revitalizing literary studies.